

# Center News

37号

2017年8月25日



写真：客員教授歓送迎会の風景

## 目次

(1) センター長挨拶	「確実に、一歩ずつ・・・」	2
(2) 田中親義客員教授	着任挨拶 「新たな歩みの場に立って」	3
(3) 寺西康雄研究協力員	着任挨拶 「今、研究協力員として」	4
(4) 各研究部門の平成 29 年度計画		5～6
(5) 安井俊夫客員教授	平成 29 年度の取り組み	7
(6) 編集後記		8

## センター長挨拶

### 確実に、一歩ずつ・・・

---

人間発達科学研究実践総合センター長 千田 恭子

昨年度、本学の大学院教職実践開発研究科（教職大学院）が始動し、また、7月には教職支援センターが設置され、教員養成が新たな局面を迎えました。さらに、学部改革に向けて大きく動こうとしている現在、それに伴い、センターにも変化が訪れるかもしれません。1982年の設置以来35年、センターはどのように変化したのでしょうか。

設置当初のセンターは急速に普及していく教育機器を教育改善に役立てる教育工学的研究と、経験によって培った授業技術を分析する等の実践的研究の2本立てだったと聞いています。その後、教育臨床の研究が加わり、問題を抱える児童生徒や保護者の相談に対応するとともに、心の問題に対応できるような教員を育てようと、多くの内地留学生の受け入れをしています。さらに、平成28年度からは環境教育の研究の場として、教材提供や栽培指導の他、有機野菜等の研究や試作など、農場を活かした組織が動き出しました。現在のセンターは、この4部門の研究の場と経験豊かな客員教授の先生方の力をお借りして、現場の教育課題に対応するために努力を続けています。

また、センターは附属学校園との繋がりにも大きく貢献しています。附属学校園との共同研究プロジェクトにおいても、昨年度はワーキンググループ内に運営グループ、研究成果発信方法検討グループ、附属学校園での大学教員による授業実施検討グループの3つが新たに設置されました。今年度は、既に行われている授業や発信を参考にし、具体的な方法について検討を始めます。

さらに、今年は北陸3県教育工学研究大会を主幹校として迎えることとなります。日々進化を続ける情報機器をどのように教育現場で役立てていけるのか等について多くの発表が行われるでしょう。有意義な大会になるように祈ります。

今後もセンターが学部の教育研究施設であることには変わりはないでしょう。そして、センターの役割は、今まで通り実践現場と学部・大学院、加えて教職大学院を繋ぎ、現職教員の資質向上及び教員養成の充実に資する活動をすることだと思えます。その役割を確実に果たし、一歩ずつ前に進めるように努力をしなければいけないと感じている今日この頃です。

## 着任挨拶

### 新たな歩みの場に立って

---

センター客員教授 田中 親義

貴重なご縁に恵まれて、今年度より実践センターに勤めさせていただくことになりました。富山県の教員として在職していた折は、足かけ9年間にわたって総合教育センターの教育相談部で仕事をしておりました。その時には、教員研修会の講師として、また、相談業務のスーパーバイザーとして、富山大学の先生方には大変お世話になりました。現職の教員を退いた今、その時のご恩返しを少しでもさせていただける機会を与えていただいたものと思っています。

私の主なる役割は、富山県内の各種学校からおいでになる内地留学生の方々に対する教育相談演習を担当することと受け止めています。それぞれの勤務校で、中堅教員として活躍しておられる現職の先生方が対象です。ご本人たちの研修意欲が旺盛なことはもちろん、推薦者の各教育委員会や勤務校からの期待も強く感じられます。それゆえ、4月当初は自分かけられた責任の重さをひしひしと感じるスタートとなりました。しかし、自分がこれまで蓄えた事柄の中から、お役に立てるものがあるならくみ取っていただきたいという姿勢で臨むより他はないと考え、努力を続けています。

「教育相談業務を経験し、児童生徒本人やその保護者・担任等の深い悩みに数多くかかわった」こと、「教員研修の企画・実施にかかわり、関係資料等の蓄えがある」こと、「義務教育学校の管理職を経験し、保護者や地域との連携協力等の重要性を認識している」ことなどを生かしながら、今年度は、以下のような取り組みを進めたいと計画しました。

- ◇ 週1回の内地留学生との研修には、演習（カウンセリングに関する文献講読や発表・討論）と実習（軽スポーツやゲーム等を通じた心理解放体験）を併せて行う。
- ◇ 研修後は内地留学生と担当教員がメールによって情報を交換し、次回に内容に関する「振り返り」の場を設けることによって、学びの深化・発展を図る。
- ◇ 演習中に内地留学生が話題提案をする機会を設け、学校現場の実状に基づく課題解決策の共有をはかる。
- ◇ 実習によって様々な心理解放の効果を体験・共有し、今後の教育実践への導入を図る。
- ◇ 教育相談機関等の研修会への参加、野外研修施設等の利用・活用等を通して幅広い識見と豊かな人間性を培い、将来の富山県を担っていくにふさわしい人材の育成を図る。

## 着任挨拶

### 今、研究協力員として

---

センター研究協力員 寺西 康雄

昨年度末、客員教授を定年退官した私は、今、研究協力員として大学の先生方のお手伝いをさせてもらっています。場面緘黙当事者Kさんをゲストとして招き、けん玉セラピー実習を中心とした内地留学生対象の教育相談研修を担当しています。

これまで何人もの内地留学生から「Kさんの存在が大きかった。大変ありがたかった」との言葉を耳にしました。場面緘黙というハンディを抱え、様々な困難に直面するKさんから提起される「難問」に私や内地留学生が真剣に向き合い、克服することによって貴重な学びをしてきたからです。

今年度、早速、Kさんから次のような「難問」が私のもとに寄せられました。

けん玉教室に行ってきました。技を披露できましたが、質問されても答えることができませんでした。けん玉の持ち方や玉の上げ方を間違っている人がいるのに、筆談用のメモ帳とペンをポケットから出す勇気がなくて伝えることができませんでした。

Kさんは「けん玉道四段」の腕前です。昨年末、経験値を高めるために県外での講習会に参加し、日本けん玉協会認定指導員の資格を取得しました。ところが、実際にけん玉教室の場に臨んでも、緘黙であるがゆえに指導員としての役割を果たすことができません。

そのKさんの悩みを伝え聞いた内地留学生から私に次のような申し出がありました。

先生は「けん玉」というアイテムを活用して、Kさんとの心の交流を図ってこられました。「けん玉」との出会いがKさんの世界を広げ、自信や勇気を与えてくれたこと、そして、これからもKさんが「けん玉」を通して社会とつながって生きていこうとされていることは理解しています。だからこそ何かお手伝いがしたいと思います。

私は申し出を喜んで受け入れ、内地留学生はKさんが使いこなせる「けん玉指導アイテムづくり」に取り組んでくれました。そして、今後のけん玉セラピー実習に向けて、内地留学生はKさんへ次のような言葉をかけ、励ましました。

あとはKさん自身の「やってみる勇気」が大切です。躊躇なく、手に取り使えるようになったらいいなと思いますし、そのためにはKさん自身の踏み出す勇気が必要です。勇気をもってできるように、まずは使ってみて慣れることが重要だと思います。

それに対して、Kさんは次のように決意を固め、その後のけん玉セラピー実習に果敢に挑んでいきました。

先生方が私のために一生懸命制作してくださったアイテムです。これから、勇気をもって使っていきたいです。

このような小さな積み重ねの中で、Kさんのコミュニケーション能力は少しずつ向上し、内地留学生の「カウンセラーとしてクライアントにかかわる力」が高まっていくのです。

## 部門計画

### 教育臨床研究部門

教育臨床部門では現職教員の再教育として年間 10 名程度の内地留学生を受け入れている。今年度も例年通り年間で 10 名程度の受け入れを予定している。内地留学経験者のうち、特に中学校教諭に関しては、教員カウンセラー（富山県カウンセリング指導員）としての活躍が期待されており、教師としての立場から、カウンセリングや学校におけるチーム支援のマネジメントを学ぶことが重要となっている。

また、今年度は新たな客員教授として田中親義先生が着任された。すでに、内地留学生との研修に加わっていただき、密度の濃い研修プランを提供していただいている。そして、昨年度までの客員教授であった寺西康雄先生には、客員教授から研究協力員と立場を変え、引き続き内地留学生への指導に当たっていただくことになった。

教育臨床研究部門における地域貢献としては、今年度も教育と臨床に関する研修会を企画している。昨年度は「不登校に生かすチームでの支援」と題し、東京学芸大学から小林正幸先生をお呼びした。近年は学校教員のみならず心理学の専門家を育成するという大きな枠組みでのチーム学校に寄与できる研修会が続いてきたが、今年度は再び現職の学校教諭を主な対象とした研修会を予定している。

### 学習環境研究部門

昨年度まで、学習環境研究部門では、ICT を活用した授業実践、プログラミング教育についての授業実践を通して、それぞれの在り方について研究を進めるとともに、関連する講演会を開催してきた。

本年度も、この 2 つについて、授業実践を通して研究を進めていきたい。また、講演会は 12 月 2 日（土）に開催予定であるが、現在、講演の内容等について調整中である。

#### 【ICT を活用した授業実践】

昨年度まで、主にタブレット端末を活用した授業実践を行い、その学習効果についての検討を行ってきたが、本年度もこのような活動を継続する。

本年度、当部門への内地留学生は、富山県内の小中学校教員 3 名である。3 名の先生方からは、当部門の研究協力員としても協力をしていただく。

具体的には、研究協力員の所属する校種、指導している学年・教科等において、ICT の活用を位置づけた指導計画や指導案を作成し、授業実践を行い、ICT を活用した学習効果等について分析する。この授業実践の成果については、当センター主催の研究会等で発表をする予定である。

#### 【プログラミング教育についての授業実践】

昨年度、人間発達科学部附属小学校のコンピュータクラブの活動で、Scratch や Studuino によるプログラミング学習を実施した。児童は関心・意欲を持って活動に取り組むことができた。

本年度は、Studuino を使用した掃除ロボットを動かす活動を進めている。広い範囲の汚れを拭き取るためにロボットをどのように動かすかを考え、試行錯誤をしながらプログラムの作成をしている。児童は意欲的に活動に取り組んでいるが、より取り組みやすい支援の在り方等について検討を進めていきたい。

## 部門計画

### 環境教育研究部門

平成 29 年度の活動計画

#### 1. 教育活動（学部①－③、附属学校園④、⑤）

- ① 栽培技術実習（高橋担当）を開講する。ジャガイモ、きゅうり、なす、トマト、枝豆、ピーマンなどの基本的な野菜の栽培技術を修得することを中心に、学校現場で求められる花壇での花卉栽培、田植え、餅つきを体験する。
- ② その他授業、ゼミ・研究室での研究利用。随時受け付ける。理科教育研究室の野菜栽培、特別支援教育研究室での、障害者との栽培体験等。
- ③ 教材提供。調理実習等に米野菜等の材料の提供。
- ④ 附属幼稚園のサツマイモの栽培。苗植えと収穫体験を行う。
- ⑤ 附属小学校、中学校への教材提供。調理実習等に米野菜等の材料の提供。

#### 2. 地域貢献活動・研究活動・その他

- ① 富山経済同友会 6 次産業委員会との共同により、大豆製品の可能性を探る研究。
- ② 富山農食健美クラブと共同で、「とみがえりのレシピ」プロジェクト実施。
- ③ えごまの栽培技術研究
- ④ 日本農業法学会 29 年度学術大会の開催

### 教育工学研究部門

#### (1) 教養科目「情報処理」のカリキュラム改善と評価

昨年度に引き続き、情報処理の授業改善と教科書の編集を行う。

#### (2) 小型コンピュータを利用した教育環境の整備

昨年度に引き続き、コンピュータの仕組みの理解を重視した、小型コンピュータの教育利用の可能性について、ハンズオン形式での教育プログラムならびに実施環境の整備を行う。

A. 昨年開発した Ichigo Jam の教材を改善し、新バージョンのIchigoJam Tを組み立て、プログラミングする演習授業を試行する。

B. Raspberry Pi によるソフトウェアに対するメンタルモデル形成

#### (3) iPad 用教材の活用と開発

- ・ Appleの作成した、コンピュータ言語Swiftの教材（swift Playgrounds）を利用したプログラミングの基礎の習得授業を行い、その効果を検討する。
- ・ Swiftを使って、iOS用のアプリケーションを作成する演習授業を設計し試みる。

#### (4) 心理学実験用プログラム開発教育

心理学における教育用プログラムとして、心理学実験用プログラムの作成を教える授業を実践し、評価を行う。プログラミング言語としてXojoならびにPsychoPyを用いる。

## 平成29年度の取り組み

### 教師と研究者による協同の学びの推進

センター客員教授 安井 俊夫

これまで学校と大学、教師と研究者による協同の学びの実現に向けて取り組んできました。現在、教育フォーラム（年一回の公開学習会）や毎月夜間行う研究会、内地留学の先生方との勉強会等を実施しています。今年度も引き続きこれらの活動を進め、より確かな教育実践とそのための支援に向け協同の学びの推進と充実に努めていきたいと考えています。

さて、この3月に小中学校の新学習指導要領が告示され、いま学校現場の大きな関心事となっています。今回の改訂は8回目となりますが、「70年ぶりの大改訂」とか、「子どもの視点に立つ、戦後最初につくられた学習指導要領に匹敵する」という声も聞かれます。「社会に開かれた教育課程」「カリキュラム・マネジメント」「主体的・対話的で深い学び」など、新学習指導要領の理念や考え方は、これからの学校の組織・経営の見直し・改善や授業の改善に大きくつながる重要な視点であり、これらの理念や考え方が学校や社会で深く共有され、実現されていくことが期待されています。そこで、今回の改訂では、すべての教職員が校内研修や多様な研修の場を通じて、新学習指導要領の理念や考え方等についてその理解を深めことができるよう、これまでには見られないような総則の抜本的な見直し、改善がなされています。今年度は新学習指導要領の理念や考え方を手がかりに、これまで取り組んできたこれからの学校教育の在り方、方向について、教師と研究者による協同の学びを進めながら探っていきたいと考えています。





## 編集後記

○平成29年6月13日（火）に、実践センターの演習室にて平成29年度第1回附属人間発達科学研究実践総合センター運営委員会が開催されました。報告事項として前年度（平成28年度）のセンター決算報告，事業報告，教育実践研究（紀要）第11号の発行，センターニュース第35号（WEB）及び第36号（冊子）の発行が報告されました。審議事項として今年度（平成29年度）のセンター予算案について審議し，承認されました。また，今年度のセンター事業計画について審議の結果，原案のとおり承認されました。教育フォーラム2017の開催，紀要第12号の発行，センターニュース第37号・第38号の発行，及び北陸三県教育工学研究大会富山大会（2018年2月予定）の実施について，審議の結果，承認されました。

ということで，センターニュースの37号を，Web配信の形でお届けします。8月も終わりに近づき，学校には子ども達の賑やかな声が戻ってくる季節になりました。いよいよ教育実習が始まる時期でもあります。人間発達科学部附属の人間科学研究実践総合センターでも，8月末にセンター紀要の投稿が締め切られ，編集作業に入っていきます。実りの多い秋になることを期待しつつ，編集後記とさせていただきます。